

紹介

論語之研究

武内義雄著

論語は孔子の言行録として比較的信用できる唯一のもので考へられてゐるが、これとても孔子自身の手になつたものでないことは勿論であつて、實は後人によつて相當永い期間にわたつて編輯されたものである。従つて論語一書の中には孔子の思想に近いものと、さうでないものとが互ひに混り合つてゐるはずである。儒家思想の本來の姿を見ようとすれば、當然これらの夾雜物を除かなければならない。ここに論語の原典批判の必要が生れてくる。

また現在の論語のテキストにも種々の異同があつて、讀み方そのものに不明確な箇所も少くないので、文字の校定が先決條件となる。ここに論語本文の校勘の必要が痛感される。この意味に於いて武内義雄博士の『論語之研究』は後學者に對する一針指を與へるものとして意義あるものとしなければならぬ。

この書は論語の校勘と原典批判の二つの部分から成つてゐるが本文の校勘の方は既に同博士の岩波文庫本論語によつて果されてゐるので、ここでは省略されて、ただその校定の基礎となつた方針が説明されてゐるのみである。従つてこの論語の研究の中心點

となつてゐるところは其の原典批判の方にあるやうに思はれる。現在の論語が比較的古い部分と新しい部分から成つてゐるものであることは、わが國に於いても遠くは伊藤仁齋を始めとして近くは内藤・狩野兩博士等によつて指摘され來つた事實であるが、武内博士はこれに更に細密な検討を加へられ本論六章のうち五章までを此のために割かれてゐる。その結論として比較的古いものと言はれてゐた上論十篇の中にも新古の別があり、殊に子罕篇の如きは下論の季氏・陽貨・微子・子張間の諸篇とともに最も新しい部分に屬するものであることを説いて居られる。勿論その細部にわたつては更に異論を挟むべき餘地も殘されてゐることは思はれるが、とにかく論語の本文成立の時期を問題とする限り、ここに示された新古の判定は恐らくは何人も妥當なものとして認めなければならぬところであらう。

然しながら、これだけに限るならば武内博士の研究は内藤・狩野兩博士によつて示された大綱の範圍より出るものではなく、ただ詳密の度を加へたといふに止まる。武内博士の『論語之研究』の特色は論語本文成立の新古の判定を、孔門諸弟子の派別と結びつけて考へられたところにあるのであつて、問題となるところも實は此處にある。たとへば雍也・公冶長・爲政・八佾・里仁・述而・泰伯の七篇は曾子思孟子の系統によつて傳へられたものであり、先進・顔淵・子路・憲問・衛靈公・子張・堯曰の七篇は子貢派によつて傳へられたものと考へられる。その主な理由としては前者に於いては曾子を中心になつてゐるに對して、後者では子貢が中

心人物となつてゐることなどが擧げられる。若しこのやうに考へるならば、論語の諸篇は孔門諸派の主張の相違を豫め知つてゐなければ理解できないものといふことになるであらう。武内博士は『支那思想史』などに於いても既に孔門の諸弟子の間に曾子學派や子游學派などといふやうな學派の別があつたことを主張して居られるが、このことは必ずしも無條件に承認せられることは言へないやうに思はれる。孟子や禮記に曾子と子游・子夏の争ひがあつたことを暗示するやうな個所はないと言へないが、然しこの程度の不和ならば單に個人間の感情の行き違ひから生じ得べきことと考へられるのであつて、このことを以つて直ちに『學派』の對立と見なすことは困難なことではなからうか。なるほど均しく儒家と言つても、孔子と孟子と荀子では三者ともに主張を異にしてゐるが、これは當然さやうになるべき歴史的な事情が背後にあつたからである。然るに孔子の弟子の間に既に主張を異にしたものがあつたといふことは如何なる理由によるのであらうか。またたとへ諸弟子の間に幾分の意見の相違があつたと假定してもその後には學派として生長して行くだけの十分な理由と基礎があつたかどうか。

ない。要するに武内博士の『論語之研究』は其の著しい特色のあるところに問題もあると言へるのではなからうか。

淺人妄語の罪を深く御詫が申上げる。(菊服本文三六二頁、圖版一三葉、岩波書店發行、定價參圓四拾錢) (森三樹三郎)

「日本思想史」中世國民の精神生活

清原 貞 雄著

日本思想史の冠題のもとに、上代より奈良朝を経て平安朝へと我が國民の精神生活の敘述を進められた清原貞雄博士は、今回その中世編を上梓せられた。卷を開くに先立ちて、その研究企畫のいかにも壯大なるに一驚し、その學的意欲のまた旺盛なるに三歎せざるを得ないのである。誠に博士が生涯を賭しての大業と言ふてよく、私はこの偉業の完成一日も早からん事を先づ祈るものである。

本書の内容は全篇を前後二篇に分ち、前編を鎌倉時代後編を室町時代に宛てられてをり各篇の最初に序論を附して時代の概観を加へられてゐるあたり、兩編はもと／＼夫々が一卷をなすべきものであつたのを便宜會卷せられて本書を編まれたものと思はれる併し卒直に言つて「中世」なる言葉は鎌倉・室町兩時代の同義語の如く取扱はれる態度には少し不滿な點がある。言ふまでもなく中世とは古代と近世と共に歴史を三時代に區分する純粹に文化史的な區分法であり、中世なる言葉からは古代的なるものより近代的なるものへの過渡の時代としての意義を深く感得するのであつ